

植民地朝鮮に対する「観光のまなざし」の形成 ——立命館大学国際平和ミュージアム所蔵絵葉書と

文化人の紀行文を中心に——

楠井 清文（立命館大学アート・リサーチセンター特別研究員）

E-mail kkt27007@lt.ritsumeikai.ac.jp

要旨

本稿では、国際平和ミュージアム所蔵の朝鮮半島絵葉書を対象に、まず絵葉書というメディアの特性と植民地イメージについて分析する。次に植民地に対する「観光のまなざし」が、どのような制度に支えられていたのかを、朝鮮総督府鉄道局によって進められた観光化政策を概観する。そして「観光のまなざし」が、実際に朝鮮半島を旅行した人々にどのように受容されたのかを、文化人が残した紀行文を通して検討する。

abstract

The Construction of the “Tourist Gaze” to Japan-ruled Korea:
Especially post-cards owned by Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University and Travel Writings by intellectuals.

In this paper, first, I wish to analyze characteristics of post-cards as e media and images drawn in these post-cards owned by Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University. Secondly, I survey policies which made tourist spots in Korea by the railroad office of the governor-general's office in Korea (Chosen Soutokufu Tetsudokyoku), so I will clarify how system supported the “Tourist Gaze” to Japan-ruled Korea. Thirdly, I investigate how the “Tourist Gaze” was accepted by tourists in Korea, through Travel Writings by intellectuals, artists and novelists.

はじめに：「観光のまなざし」と絵葉書

近年、植民地の文化状況を考える上で、絵葉書という視覚資料への注目が集まっている。例えば高麗美術館では2010年8月21日～10月17日に特別企画展「1910年日韓併合から100年『写真絵はがき』の中の朝鮮民俗 100年前への時空の旅[1900-1945年]」が開催された。またWeb上でも国立民俗博物館「松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション」¹や京都大学地域研究統合情報センター「戦前期東アジア絵はがきデータベース」²など、画像公開を行う機関が増えている。またこれらを植民地文化研究の中でどう扱うかについて、貴志俊彦・権懋熙³・

浦川和也・山本俊介・水野直樹らによる議論が積み重ねられてきた。

例えば貴志俊彦は絵葉書を資料として扱う際、(1)画像資料としての価値に注目する建築史・美術史、(2)プロパガンダとしての側面に注目するメディア史研究・政治学、(3)印刷技術史、(4)情報資料学・文献学、の4つのアプローチが可能だとする⁴。

従来、植民地支配との関わりで言及されたのは(2)の側面だろう。例えば朝鮮総督府が発行した絵葉書には統治実績の数値を図案化したものもある(図1)。つまり絵葉書のイメージは事実を単純に再現したものではなく、植民地支配者側の政治的メッセージ(プロパガン

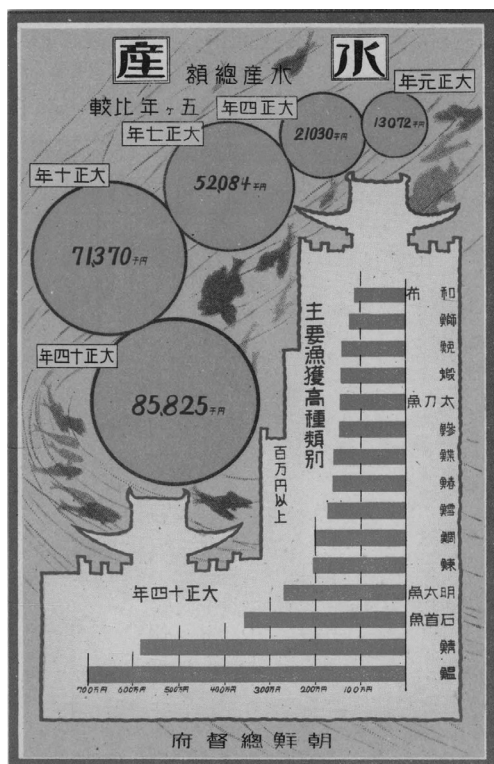


図1 「統計絵はがき」(朝鮮総督府発行)

ダ) が込められているとするものである。

しかし多くの朝鮮半島絵葉書で描かれているのは、他の地域の絵葉書同様、名所旧跡や現地風俗である。近年では、これら直接的でないプロパガンダを扱った絵葉書のイメージが持つ政治性が分析されている。

例えば名護屋城博物館所蔵の朝鮮半島写真絵葉書を分類した浦川和也は、「韓国風俗」「朝鮮風俗」等のシリーズ名が多用されている点に注目し、「日本人が朝鮮半島の人々の職業や生活の様子などのいわゆる『風俗』を写真絵葉書として紹介することは、日本人の朝鮮半島の人々に対する『好奇の目』が存在した」と指摘する。そして「当時の日本人にとって、『我々よりも遅れている』と認識された人々への蔑視が、『風俗』の写真絵葉書発行の根底に存在したのではないか」⁵と論じている。

また朝鮮近代史の水野直樹は、朝鮮で発行された日本人向けの絵葉書には、「朝鮮で日本人の見たもの、あるいは見せたかったもの、さらに言うなら、絵はがきの作成者、日本の支配当局が朝鮮に来た日本人に見せたかったものの

姿が表されている」とし、具体的には「『典雅』ではあるが古い朝鮮の風俗と文化」と「『堂々たる』近代的な日本の建造物」という「植民地支配が生み出し、それを支える対比的なイメージ」が描き込まれていると指摘した⁶。

以上のように朝鮮半島絵葉書には、作成者である日本人の植民地認識(「目」「見方」)が定着されている。ここで特に注目したいのは、絵葉書が購入され使用される状況、つまり「観光」という行為との関係である。

多くの場合、絵葉書は観光客によって購われ、旅先から知人に送られたり、旅の記憶を留めるため手元に保存されたりする。絵葉書のイメージは「販売者(発行者)から購買者へ」発せられると共に、「差出人(≒購買者)から受取人へ」差し出されるという、二重の回路の中で流通する⁷。従ってこれらの流通を支える「観光」という行為の特質と絵葉書との関係を考察する必要があるだろう。

柏木博は「観光旅行先で絵葉書を手に入れる人々とは異なり、旅行に先立って絵葉書を見る機会を得た人々は、絵葉書に映し出された風景を求めて、むしろその風景を確認するために旅行に赴く」とし、「絵葉書は、大衆の視覚を拡大させるその一方で、風景を見る視点を固定した」⁸と述べる。

またJ・アーリは「観光」とは「日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどにたいしてまなざしもしくは視線を投げかけること」だとし、「このまなざしは社会的に構造化され組織化されている」⁹。「このまなざしは、今度は写真や絵はがきや映画や模型などを通して、通常視覚的に対象化され把握されていく。このことでまなざしははてしなく再生産し再把握をくりかえす」¹⁰と論じている。

このように「観光」とは事前に見たいと志向させられたものを確認するため見る行為であり、そこで絵葉書は固定されたイメージを流通させ、予め見たいと思う対象を作り出す役割を果たす。そこには単に支配当局の見せたいイ

メージだけでなく、不特定多数の一般的な日本人が見たいと思っていた姿が集約されていたと考えられる。

その一方で、「観光」には「一国のすぐれた風光や文物を観る」「視察」という語義と共に、「国の光を他国にしめす」という意味合いもある¹¹。植民地を観光地化し、見る対象としていた日本人は、同時に植民地の人々から見られる自分を意識してもいた。そのようなあり方を、日露戦争後に実施された二つの「観光」、即ち日本から満洲・韓国への海外旅行と、韓国からの観光旅行団との対照から見るができる¹²。

そこで本稿では、絵葉書と紀行文の分析から、当時の人々が植民地で何を見ようとしていたかという欲望の性質を探りたい。以下では、まず日露戦後の絵葉書ブームにおける言説を分析し、〈視察する〉〈国威を示す〉という「観光」の両義性が、既に絵葉書という文物を受容する中で議論されていることを指摘したい。

1 絵葉書という制度の定着：

日露戦争後のブームとナショナリズム

絵葉書の起源は、1870年代のドイツで、プロシャ宮廷の御用書肆兼印刷業者だったシュワルツが、普仏戦争の際にその様子を葉書に印刷して故郷へ送ったのが最初だとされている。その後、同人により風景・風物写真を絵葉書としたものも発行された¹³。ヨーロッパではドイツを中心に絵葉書の流行が起こり、1880～90年代には各地の都市で絵葉書屋が見られ、また交換も行われるようになった¹⁴。

絵葉書コレクターでもあった文学者・巖谷小波は、明治20年代のこととして「其頃独逸に留学して居た友人から、近来かう云ふのが流行ると云つて風景の刷つてある葉書をよこした。余は頗る珍重して、来客毎にこれを示めしたのに、誰れも珍しがらぬ者はなかつた」¹⁵と回想しており、当時の日本人に絵葉書という文物が目

新しかったことが分かる。

日本での絵葉書発行と流行について『明治事物起原』では、1900（明治33）年「五日発行の『今世少年』第一巻九号に、石井研堂案、小島沖舟筆、二少年シヤボン玉を吹く図の彩色石版摺絵葉書を附録として読者に頒つ。これ私製絵葉書の始めなり」とし、「絵葉書の最も盛んに行はれたるは三十七八年征露の役、在外将卒慰問に之を使用したるに起り（中略）絵葉書熱沸騰した」が、「戦役の終局と共にやゝすたれ」と述べている¹⁶。日本での絵葉書発行は1900年頃始まり、日露戦争時に一つのピークに達したといえる。その背景には、写真・印刷といった複製技術の発達や近代的郵便制度の確立があった。その経緯をまとめると【表1】のようになる¹⁷。

【表1】近代郵便制度の確立

1871（明治4）年	東京・京都・大阪間で近代的郵便制度が実施。
1872（明治5）年 3月	横浜・神戸・長崎の三港に英米仏の郵便局を設置。
6月	近代的郵便制度が北海道を除く全国で実施。
1873（明治6）年 4月 8月 12月	郵便規則が定められ全国均一料金となる。 日米郵便交換条約締結。 官製葉書発行。
1876（明治9）年 12月	韓国・釜山に日本郵便局開設。
1877（明治10）年 2月	万国郵便連合加入。
1885（明治18）年 12月	逓信省創設。
1895（明治28）年 3月	日本軍が台湾・澎湖島に野戦郵便局開設。翌96（明治29）年3月からは内地同様の郵便制度を実施。

1900 (明治 33) 年 10 月	郵便法制定。私製葉書の印刷・発行が許可される。
1902 (明治 35) 年 6 月	最初の官製絵葉書発行。
1904 (明治 37) 年 10 月	日露戦争による絵葉書ブーム到来。 『ハガキ文学』創刊。
1905 (明治 38) 年 4 月	日韓通信機関委託に関する協定が成立。韓国の郵便事業を日本政府が引き継ぎ国内同様の制度を敷く。

以上から分かるように、近代郵便制度の確立は二つの側面を持つ。一つは世界的な郵便システムの中に日本が組み込まれたことである。この点について佐藤健二は、「郵便という『紙の道』が世界に開かれていた」ことと絵葉書の流行が関係していたと興味深い指摘を行っている。

国内で私製はがきが許される以前にも、海外からの絵はがきはすでに存在し、また外国人むけのおみやげ用品として絵はがきが商品化されていた。日本は、一八七七（明治一〇）年に万国郵便連合条約に加入し、すでに郵便制度の国際化を果たしていたから、国外からの、あるいは国外への通信は可能だったのである。

絵はがき文化の発育を促した要素のひとつに、こうした紙の道の世界化を前提とした海外からのインパクトがある。その海外は、学びにゆく人々にとっての洋行先であるとともに、すでに絵はがきの蒐集家が活動をはじめていた先進地であった。（傍線引用者・以下同）¹⁸

巖谷小波の回想にもあるように、絵葉書もまた海外から学ぶべき先進的な文物の一つだった。別の点から言えば、日本での絵葉書発行は、世界に開かれた「紙の道」を意識したものとならざるをえなかった。

例えば日露戦後の絵葉書ブーム期に刊行さ

れた『詩的新案絵はがきの栞』は、「世界の公園、はた美術国としての日本を、欧米の大都府に紹介するため、続々欧米人の嗜好に投ずべき種類の絵葉書を作りたいものである」¹⁹と、日本で発行される絵葉書が世界に向けて「美術国としての日本」のイメージを発信すべきだとしている。郵便という「紙の道」を通して、日本は世界からの視線を意識したのである。

注目したいのは、絵葉書を通して日本の価値が世界に認められるべきだという認識が見られる点である。その背景には日露戦後のナショナリズム高揚があるだろう。この点について日本葉書会発行の雑誌『ハガキ文学』臨時増刊「万国絵葉書帖」²⁰から確認したい。

「緒言」では「戦勝の国東海の日本が、鬱勃たる国運の旺昌を致してより、絵葉書の流行甚だ盛なるを見るは吾人の密かに以て欣びとする処」とあり、また「一国の絵葉書が如何に其国運の標象にして、如何に其国内面の消息を語るかは、請ふこれを『万国絵葉書帖』に看よ」と述べている。ここでは絵葉書の流行を「戦勝の国」という立場と関係づけ、また絵葉書の内容がその国の「内面」を象徴すると主張する。ではどのような内容の絵葉書が、戦勝国日本にふさわしいとされたのだろうか。ここで持ち出されるのは「文明」「未開」という尺度である。

まず「絵葉書の真価のあるのは文明国で発行するものに限る、高尚な趣味は文明国民をまつて初めて解せられる、精巧な印刷は文明の利器の応用でならでは出来ぬ」²¹とあるように、価値ある絵葉書は「文明国」でなければ発行できないとされる。一方、「未開国は絵葉書の上乗のものを出さない。（中略）単に風景風俗を見るのだから極め単純で面白みが少ない」と、「未開国」の絵葉書は無価値であり、ただ「珍らしき風俗のあるのは未開国」と述べられる。「未開国」の絵葉書は、「風俗」の特異性のみが珍重されるべきだとしている。

この絵葉書における「文明」「未開」のヒエラルキーの中で、日本はどこに位置づけられる

のか。

我国に於て絵葉書が初めて出た頃は所謂未開国の絵葉書の様に風景風俗を紹介するに止たが、近頃になつて幸に我国の絵葉書が只珍ら敷いと云ふ外に余程美術的になつてきた。元来我国は独特の美術を以て鳴つた国柄なのであるから、早く此の過渡時代を過ぎて我輩は我絵葉書界が更に進歩を加へ世界絵葉書界の重鎮たらん事を切望して止まぬ。

つまり日本は「風景風俗」を紹介する「未開国」から、「美術」に注目される「文明国」へと移行しつつあるというのが、日露戦後の絵葉書ブームにおける認識だった。世界に繋がる「紙の道」を前に、日本は今後独自の立場を占めるべきだ、という主張がここには見られる。

以上から絵葉書の流行が、「文明」「未開」という尺度を受け容れ、「文明」の立場へ積極的に同化する機運と結びつけて語られていたことが分かる。それは「文明」の側から「未開」の地域を見下す態度とも不可分だった。例えば「世界の絵葉書 亜細亞洲」では中国・韓国について、

支那 誰れも知つての通りの未開国で而も一般人民の頭脳を埋めて居るものは一から十まで金だ。(中略) 此の国の絵葉書は単に外国人に見せる為め景色とか風俗などの外の出版物は皆無である。まづ支那の絵葉書は写真以上に価値を有してをらぬと云つても蓋し過言ではあるまいと思ふ。(中略)

朝鮮 此国には絵葉書が極めて稀である。只僅に我国の上方屋辺にて製したありきたりのコロタイプ風景があるのみだ。

とあり、「美術」としての絵葉書を産出しないことが「未開国」の指標とされている。

また「万国絵葉書帖」には、実際に各地から寄せられた絵葉書とその文面が掲載されており、当時の旅行者が何を見、感じたのかを窺うことができる。例えば「第一信 韓国より」で

は鉄道網の整備を示す写真(図2)と共に、以下の文面が綴られていた。

無事本日釜山に到着仕候。この国の未開なる事今更に驚嘆の外無之、農業に其法拙劣、鉱業に掘採の術開けず工業は幼稚、商業は平日に都会にても行はれず只市日に物品交換行はるゝのみ市街は道狭くして、家屋は低く不潔を極め候、早く日本人の手によりて此邦を開拓せざるべからずと感じ候。

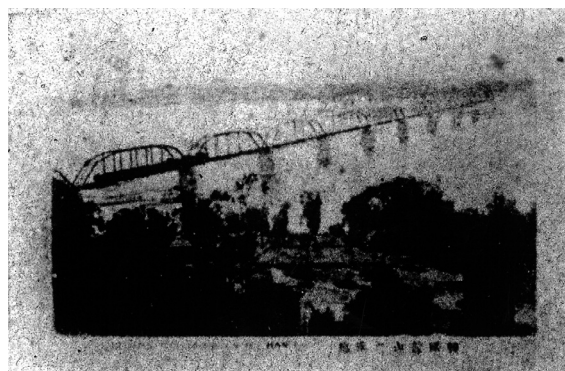


図2 「第一信 韓国より」

後述するように韓国での鉄道敷設権は日本によって独占されつつあった。写真はその進展を示すと共に、「未開」の韓国を「開拓」すべきだとする書き手の主張を裏付けるものとなっている。

また「第二信 清国より(一)」では、「纏足」を「支那の一大奇習」として、「如何に美人にてもこれにてはモデルになれず、馬鹿も大概にするがよく候」と感想を述べており、裏面の図は「上海名妓」である(図3)。書き手の中国



図3 「第二信 清国より(一)」

女性の「風俗」に対する好奇の視線は蔑視を含んでいるが、絵葉書のイメージはその印象を補強し、受け手にも共有させる。

このように絵葉書というメディアは、書き手の旅の記憶をイメージという形で定着し、同時に遠隔地にいる受け手と共有化する。この点は、近代郵便制度の第二の面とも関わるだろう。それは植民地が日本国内の均一な郵便ネットワークに組み込まれたことである。これに関連して国府犀東「絵葉書と民族膨脹」²²は、「絵葉書の流行は、一方より見れば、民族膨脹のエムブレメント」と述べる。

母国と植民地、本国と外国との間に海山万里を隔てたる同胞が、各自相互に、其周辺の以て絵にすべき者を、相交換して、共に相慰藉せんとの要求、漸次に盛なるより起りし者、是れ絵葉書流行の原因なるが如し。(中略) 同胞の世界各所に、其播布の範囲を拡大するに随ひ、絵葉書の要求は、益す加はるべし。

ここでは絵葉書の流行が、日露戦後の日本人の海外進出と結びつけられている。植民地を含む日本人の活動範囲の拡大に伴い、より緊密なコミュニケーションの手段が求められた。国府はそれを絵葉書流行の要因とする。実際【表1】が示すように、日本の領土拡大に連れて、郵便制度は新たな地域を編入していった。郵便のネットワーク、そして「内地」の人々にとって見知らぬ異国の風景風俗を伝える絵葉書は、植民地を身近な存在に感じさせたのである。

2 国際平和ミュージアム所蔵資料と朝鮮の観光政策

日本人により発行された朝鮮半島絵葉書はどのようなものだったのだろうか。絵葉書コレクター・小竹忠三郎の『訂正増補再版 日本全国名所葉書目録』（小竹忠三郎 1913・12・5）によれば、韓国併合後わずか3年の時点で、既

に360種の絵葉書が発行されている。発行地は朝鮮半島全土にわたり、京城（64,583戸中、日本人11,276戸）・釜山（15,354戸中、日本人6,371戸）・平壤（10,210戸中、日本人1,977戸）など比較的大都市から、日本人戸数が20戸弱の地域まで、各地元を題材にした絵葉書が出されている。発行者の多くは、現地の写真館・商店などだった。

今回調査した国際平和ミュージアム所蔵朝鮮半島絵葉書は全29点（167枚）であり、内訳は別掲【表2】の通りである。未使用のものも多いが、恐らく記念品などの目的で購入され、そのまま原所蔵者の手元に保管されていたと考えられる。従って実際の使用状況を辿ることは難しい。しかし保存状態が良く、封筒も含めて揃っているという特長がある。

また同ミュージアムには、絵葉書以外にも朝鮮総督府鉄道局などが作成した観光案内・パンフレット・チラシが所蔵されており、これらを総合的に扱うことで、朝鮮の観光化政策の中で絵葉書が果たした役割を明らかにできる。李良姫は鉄道局が発行した旅行案内書や葉書に触れて、次のように述べている。

朝鮮総督府鉄道局より鉄道沿線を中心とした朝鮮鉄道旅行案内書が数多く発行され、朝鮮は観光地として内外に広く紹介されることになる。また、それに併せて朝鮮総督府鉄道局は、朝鮮に関する葉書を数多く発行している。これらの葉書は、朝鮮の風景や美しい自然、人々の生活が大部分である。また、交通手段、費用、案内者、宿泊施設の案内などが掲載されてあるものもあり、葉書やそれを収める小冊子だけでも十分に朝鮮観光ができるようなものであった。²³

朝鮮の観光地開発を積極的に推進した存在として鉄道が挙げられよう。そこで鉄道網の整備と観光化を【表3】にまとめた。²⁴

ここから分かるように、鉄道網の整備は朝鮮内部だけでなく、日本や中国（満洲）との相互

【表3】朝鮮の鉄道網整備と観光化

1899 (明治32) 年 9 月	米国人モールスから鉄道敷設権を引き継いだ京仁鉄道合資会社により京仁鉄道（京城—仁川）開通。
1904 (明治37) 年 3 月	日露戦争に際し京義鉄道（京城—新義州）を軍用鉄道として着工。
1905 (明治38) 年 1 月	京釜鉄道（草梁—永登浦）開通。
5 月	馬山線（馬山浦—三浪津）開通。
1906 (明治39) 年 4 月	京義鉄道全線開通。
7 月	統監府鉄道管理局が設置される。
7～8 月	朝日新聞社主催で満韓巡遊旅行実施。
1908 (明治41) 年 7 月	鉄道管理局が「トマスクック・アンド・サン」社、「イギリス寝台会社東洋支配人」と協定を結び、外国人観光客旅行の便宜を計る。
1909 (明治42) 年 4～5 月	京城日報社主宰で韓国観光団来日。

1910 (明治43) 年 10 月	朝鮮総督府設置に伴い、朝鮮総督府鉄道局が設置される。
1911 (明治44) 年 11 月	中国・朝鮮間の鴨緑江架橋。釜山—奉天間が開通し、朝鮮から満洲への直通ルートが完成。
1913 (大正2) 年	朝鮮および朝鮮鉄道紹介のため東京に朝鮮鉄道案内所を開設。
1914 (大正3) 年 1 月	湖南線（大田—木浦）開通。
8 月	京元線（京城—元山）開通。
1915 (大正4) 9～10 月	京城で「始政五年記念朝鮮物産共進会」開催。
1917 (大正6) 年 8 月	朝鮮の鉄道経営が南満州鉄道株式会社に委託される（～1925年3月）。
	東京・大阪・下関に鮮満案内所を開設。
1929 (昭和4) 年 9～10 月	京城で「朝鮮博覧会」開催。

の交通が緊密になることも意味していた。「満韓」「満鮮」旅行という呼称が定着し、紀行文の書名でも用いられていることから分かるように、朝鮮と満洲は日本人にとって一続きの意味を持つ場所だった。

これらの地域への観光が持っていた意味について、李は「日本植民地初期の満州・朝鮮への視察・観光は、日清・日露戦争に勝利したプライドの確認と未開の国、遅れた国を植民地にすることの必然性、また発展させるための高揚を鼓舞するもの」だったが、「植民地統治が成

熟して以降は、植民地政策の成功をアピールし、それを衆目のところとするための視察・観光に変質した」²⁵と指摘する。

このような積極的な観光政策の中には、新たな名所の開発も含まれていた。その代表として、多くの紀行文で言及される金剛山が挙げられる。金剛山は日本統治時代以前から名勝として知られていたが、鉄道局はそれを観光名所化すべく宣伝に力を入れた。江口寛治『朝鮮鉄道夜話』（二水閣 1936・6・10）によれば、

半島の名勝「金剛山」の名は古くから伝

へられたものだが、それが昨今のやうに世界的に有名になつたのは鉄道が宣伝に力瘤を入れたからである。(中略) 由来内金剛は京城に近いために、古くから文人墨客の訪れるもの多く、山嶽、溪流、潭淵、奇巖等は、名称が附けられて居たが、外金剛は一二を除く外名前がなく(中略) 便宜上温井里の近くから万物相までの溪流を湘水、その山峽を寒霞溪、万物相中天女の沐浴したといふ巖峰を天女峰、其北西の最高峰を釈迦峰、勢至峰、神溪寺前の高峰を彩霞峰と命名した(74-76頁)

という。更に「大正四年秋京城に始政五年記念共進会が開かれるのを機とし(中略) 京元線平康及び元山から自動車道路を作り、鉄道では



図4 (絵葉書)「始政五年記念朝鮮物産共進会京城協賛会演芸館」(中券番発行)

直営自動車を運転し外金剛温井里内金剛の長安寺ホテルを開業すること、なつた」(78頁)。金剛山を単独で扱うのではなく、同時期に京城で開催された博覧会「始政五年記念朝鮮物産共進会」(図4)と関連づけたのである。

このように朝鮮の観光地化とは、各地の名所を繋ぐ交通網や宿泊施設の整備により、全土を巡遊することが可能なシステムの構築を意味していた。旅行者は一箇所に滞在しじっくりと鑑賞するのでなく、予め名所としてピックアップされたスポットを慌ただしく巡り、朝鮮についての見聞を得たと満足する。

例えば『昭和七年版朝鮮旅行案内』(朝鮮総督府鉄道局 1932 図5)は、鉄道局が発行した旅行案内の一つであり、実際には折りたたみ

袖珍版として携行された。表面には「朝鮮鉄道及航路図」の他、「日支聯絡図」(図6)・「欧亜聯絡交通図」(図7)が掲載され、朝鮮を旅の起点または終点として、他の地域との交通網の中に関係づけている。また裏面には「朝鮮鉄道沿線主要地概要」があり、旅行者が朝鮮全土のどこで何を見るべきかを詳細に指示している。

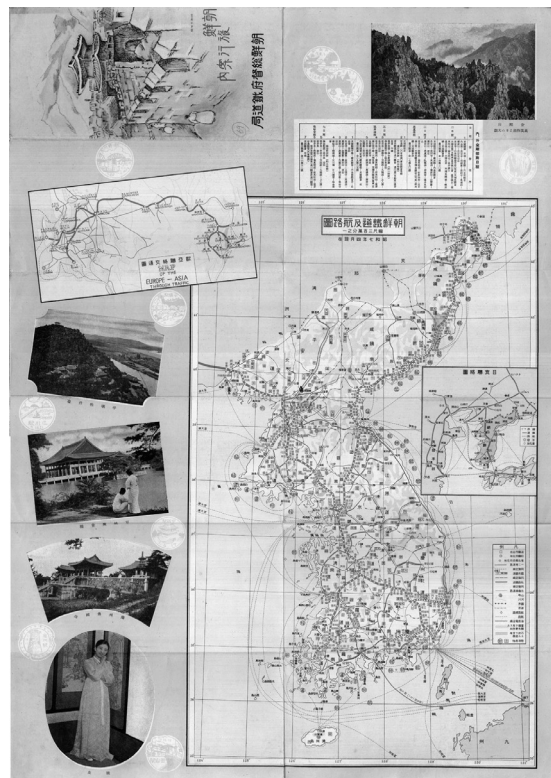


図5『昭和七年版朝鮮旅行案内』



図6「日支聯絡図」

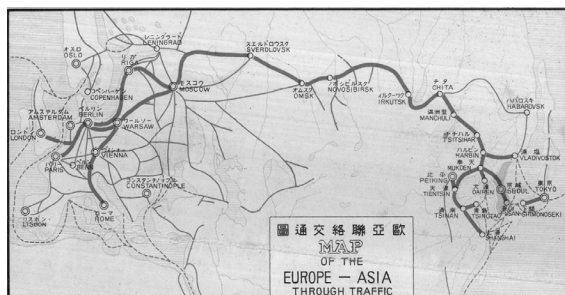


図7 「欧亜聯絡交通図」

3 文化人達の紀行文に見る朝鮮イメージ

以上では朝鮮半島の「観光」を支える二つの制度、絵葉書と鉄道網について見てきた。以下では1900～10年代に実際に現地を旅した人々が、自己の体験をどのように記述したか検討したい。それは制度的に形成された「観光のまなざし」を、個々の旅行者がどのように受容・解釈していったのかを検証することである。

韓国（朝鮮）に関する紀行文が最初に多く書かれた契機は日露戦争だった。従軍記者・作家による戦場報道の一部として詳細な情報もたらされた。例えば博文館の従軍記者として参戦した田山花袋は、『第二軍従征日記』（博文館1905・1・23）²⁶で最初の印象を次のように書きとめている。

美しい日影、珍しい家屋、詩趣あり気なる岩山（中略）文を書きながら、色々空想を逞うした。／松原の中に梅と桜が一番に咲いて居ると言つた、其処には美しい鳥が面白い春の調を囀つて居りはせぬであらうか。白壁造の面白い建物があると言つた、其処には世に知れぬやさしい恋が隠れて居りはせぬであらうか。ことに長烟管をくはへ、白衣を着て、悠々と街頭を歩き行く亡国の民、自分の空想はいかに深く其亡国の民の上に及んだか知れぬのである。

花袋は知人のもたらした手帳のスケッチを元に、現世から隔絶した桃源郷的な場所をイメージしている。それは彼が実際に上陸せず、

船上から瞥見したに過ぎなかった点とも関係しよう。牧歌的な韓国人の姿は、現代社会では生存できない「亡国の民」という消極的な表現を与えられている。

山路愛山「韓山紀行」（『日露戦争実記』1904・5～6）²⁷もまた、

春過ぎて夏来にけらし白妙のころもほ
すてふ天のかく山

時正に春夏の交、韓人の白衣を干すこと真に此の如し。僕の眼に映じたる韓人は実に我奈良朝時代の復活なり。唯韓人の生活は精神なき奈良朝生活にして、奈良朝の生活は精神ある韓人生活なるを感ずるのみ。韓人の労働者は身体体力共に邦人に勝る。

と万葉集の歌を引いて、「奈良朝」の日本を連想している。しかし同時に、日本人と「韓人」との差異として「精神」の有無を挙げ、「韓人」の優越性を「身体体力」に求めている。また初めて釜山の市街を見た印象は、「新潟の朝市に殊なら」ないが、「唯其の極めて汚穢なるを異にするのみ」と語られる。

以上からは、肯定・否定いずれにせよ、韓国を同時代から隔絶した存在として捉える視点が見られる。第1章でも触れたように、日本が自己を「文明」に同一化すると対照的に、韓国は「文明」の他者である「未開」へと位置づけられた。愛山が強調する「精神」性の欠如と「身体」性の優位、「汚穢」などは、「未開」の表徴と言えよう。

同様の記述は、日露戦後の1906年7～8月に朝日新聞社が主催して実施された「満韓巡遊旅行」でも見られる。この旅行では一般から募集された参加者が、朝日新聞社の用意したロセッタ丸に乗船し釜山から上陸、陸路朝鮮を北上した。その道中の様子は、スケッチや写真、そして紀行文によって絶えず紙面に紹介された。その記事の一つ、木崎好尚「雄大なる平壤」（『大阪朝日新聞』1906・8・14）は、次のように平壤の様子を描く。

万寿台に日清戦争の哀悼碑を拜み、日露戦

争病死者（中略）の墓を弔し、江流に臨める古刹永明禪寺を訪ひ（中略）すぐ頭の上の乙密台に攀登れば、早や打集ひし会員の面々、安満少佐の平壤攻撃講話の予定を今や遅しと待構へて居る。（中略）元山街道に臨める七星門は、日露戦争序幕の騎兵の衝突にて名高い所。

ここから明らかなように、参加者の期待は、朝鮮固有の歴史文化を理解することなく、日清・日露戦跡としての朝鮮を見聞することに向けられていた。また同記者の「京城雑感」（『大阪朝日新聞』1906・8・12）では、

長大な立派な体格でありながら、^{むぐら}鼯鼠の穴のやうな窮屈千萬な家（？）に棲み生計に余裕のありさうにも無いのに遊んで暮らし長煙管を生命の二番目として悠々閑々（中略）日本の善い所が、まだ十分に注ぎ込まれて居ない

と、韓国人の“怠惰”なイメージが描かれ、恐らく“勤勉さ”を意味する「日本の善い所」が徹底されていないと指摘する。同年2月には韓国統監府が開庁し、保護国化が推し進められたばかりだった。観光のまなざしが、韓国を領有する統治者の視点と重なっている点に注意したい。

一方、この観光旅行から3年後に韓国から日本へ韓国観光団が訪れた。彼らに対する報道から窺われるのは、「未開」の朝鮮に対して、「文明」国である日本の国威を示すという姿勢である（図8）。



図8 「文明の馳走」（『読売新聞』1909・4・14）観光団員「面のあたり文明の馳走に預つてうれし涙が溢れる……」

例えば王子製紙製絨場を見学した一行に触れた「王子に於ける観光団」（『東京朝日新聞』1909・4・26）では、「汚なき羊毛が遂に純白或は紺或は茶等の麗しき羅紗となりて巻取らるゝの早技を見せられ一行は唯パチグリ／＼と眼を瞠るのみ」と述べられ、また浅草電気館で映画を見た時の様子は、「ロンドン動物園には痛く感動せしもの、如く麒麟、白熊、象など出て来れば『あ、あれは一昨日見た麒麟だ、白熊だ、やあ象が子供を脊に載てゐる』など、呼び彼処にも此処にも『チャムチヨウソ』（如何にも面白い）『イーサンスロウスンニダ』（珍しい）などの叫声聞ゆ」²⁸とされている。

このような韓国観光団に関する新聞報道は、韓国人の「未開」を際立たせると共に、日本の保護国化に反対だった韓国の民衆が、日本の「文明」に帰依し、進んで日本による指導を求めつつある、という印象を与えるのに効果があっただろう²⁹。

1910年の韓国併合を経て、朝鮮が植民地化されると、観光の意義は日本の領土としての朝鮮を確認する行為へと変化した。大町桂月『満鮮遊記』（大阪屋号書店 1919・10・25）は、「序」で「朝鮮は今や皇国也。南満州の地は、近く日清戦争に、日露戦争に、我同胞の鮮血を流したる処にして、現に我同胞の活躍せる処也」と高らかに宣言する。そして金剛山の登攀では、

一天全く雲なし。海の果にも雲見えず。白みたる天は次第次第に黄味を加へ（中略）終に光芒一点より迸つて、うれしや団団たる大日輪、直に海の面より躍り出でたり。こゝも今は日本国なるが、日輪の出でたるあたりが神州なり。万世一系の天皇のいます処也。

と山頂から東方の日の出を拝し、「ここ」（朝鮮）と「日本国」の繋がりを認識する。日韓の過去の歴史もまた、併合の事実を正当化するために引用されている。

金海はその金首露王の都せし処也。而して任那日本府の在りし処也。（中略）日本府

は今日の総督府の前身也。総督府は昔の日本府の後身也。(中略) 当時は支那の勢力朝鮮に充ちて、日本の勢力全く朝鮮より失せたりし也。千余年後の今日は、全く反対の現象を呈するに至れり。

かつて「文明」の中心地だった「支那の勢力」が衰え、替わって日本が「文明」の立場に位置するようになる。桂月は過去の歴史と、「反対の現象」を呈する現在を対比することで、韓国併合が歴史的必然であるかのように語っているのである。

おわりに

本稿では、絵葉書という視覚資料と、紀行文という文字テキストに現れた植民地イメージを分析し、両者が朝鮮に対する「観光のまなざし」という共通する視線で描かれていることを論じた。「観光のまなざし」とは、「文明」「未開」という尺度に、自己の見聞を当てはめていくことであり、「文明」=日本／「未開」=朝鮮という対照を強化するものである。そこから「未開」が「文明」に保護・教導されるのは必然であるという、植民地支配を正当化する論理も生まれてくる。

最後に指摘したいのは、朝鮮を「未開」として他者化しながら、同時に“朝鮮らしさ”を趣きある対象として求める視線が見られることだ。図9は朝鮮の住居街を描いた絵葉書だが、以下のような解説文が付されている。

現代的大建築簇々と建ち、旧朝鮮町の陋穢は全く失せて居るが、鍾路を中心として多く北西部に集中したる地域には、未だ朝鮮町らしい情趣が漂つて居る。

多くの朝鮮半島絵葉書は、図10のような日本による堂々たる洋風建築と共に、朝鮮の風俗・習慣を好んで描いた。そこには自己を「文明」の立場に位置づけながら、“朝鮮らしさ”を消費していく姿勢が見られるのである。



図9 (絵葉書)「【京城】鮮人街 VIEW OF THE FAMOUS PLACE, KEIJO」



図10 (絵葉書)「(京城)最大の建築、朝鮮総督府の偉容 THE GRAND SIGHT OF THE CHOSEN GOVERNMENT OFFICE, THE LARGEST EDIFICE IN KEIJO」

【表2】国際平和ミュージアム所蔵朝鮮半島絵葉書

資料番号	資料名	点数	作成者	備考
6819	軍人郵便絵葉書	1	陸軍恤兵部	キャプション「帰化城慶凱大橋 鶴田吾郎氏筆」。消印有り。
7866	(絵葉書) 陸上より見たる朝鮮仁川港	1	仁川湍川絵葉書店	キャプション「陸上より見たる朝鮮仁川港」
16981	(絵葉書) 朝鮮名所	1		キャプション「(朝鮮名所) 京畿道水原訪花随柳亭 (水1) The Juiryu-tei of Syuwon.」。消印有り。
16982	(絵葉書) 朝鮮名所	1		キャプション「(朝鮮名所) 水原華西門 (イ851) KASEIMON A GATE AT SUWON.」。消印有り。
16983	(絵葉書) 朝鮮平壤大同江	1	平壤協坂写真部	キャプション「Wakizakka Shoten. Heijo, No151 Ta-tong River at Heijo, 朝鮮平壤大同江 (平壤協坂写真部発行)」。消印有り。
17484	(絵葉書) 始政5年記念朝鮮物産共進会京城協賛会演芸館	1	中券番発行	キャプション「始政五年記念朝鮮物産共進会京城協賛会演芸館 (中券番発行)」。
17485	(絵葉書) 大正五年朝鮮総督府始政六周年記念	4 (3)	朝鮮総督府	手製の封筒付き。消印有り。
32544	朝博絵葉書	18 (17)	京城協賛会	封筒有り。朝鮮博覧会の記念絵葉書。
32545	統計絵はがき	6 (5)	朝鮮総督府	封筒有り。
32546	平壤名勝絵葉書	9 (8)	大正写真工芸所	封筒有り。
32547	朝鮮絵葉書	7 (6)	朝鮮総督府	封筒有り。
7698	神秘に富める慶州新羅の古蹟 第一輯	9 (8)		封筒有り。
16986	(絵葉書) 朝鮮太田春日町	1		キャプション「朝鮮太田春日町 (基・二)」。
16990	(絵葉書) 大札記念 (大札楽之図)	1	朝鮮総督府	
18248	京城の殷賑	21 (20)	大正写真工芸所	封筒有り。16枚1組と4枚別組が混在。
18249	京城の名勝 第二輯	10 (9)	京城大阪屋号書店	封筒有り。
18250	風光明媚 平壤の名勝	13 (12)	乙密茶屋発行	封筒有り。
18251	大田名所絵葉書	11 (10)	公文堂書店	封筒有り。
17486	朝鮮の風光	6 (5)	朝鮮総督府鉄道局	封筒有り。
17487	朝鮮の風光	7 (6)	朝鮮総督府鉄道局列車食堂	封筒有り。
17488	朝鮮風景風俗絵葉書	13 (12)	日之出商行 (京城)	封筒有り。
17489	(絵葉書) 朝鮮京城龍山停車場	1	日之出商行 (京城)	キャプション「朝鮮京城龍山停車場 RYUZAN STATION,(31)」。
17490	(絵葉書) 忠清南道鷄龍山頂上鉄製古代の記念碑	1		キャプション「(朝鮮名所) 忠清南道鷄龍山頂上鉄製古代の記念碑 (忠南3) THE MONUMENT MATE OF CANON.」。
17491	朝鮮神宮絵葉書	7 (6)	朝鮮神宮社務所	封筒有り。
17492	国幣小社 京城神社絵葉書	10 (8)	京城神社社務所	封筒と神社からのお知らせの紙有り。
17493	THE TYOSEN HOTEL KEIZYO	5 (4)	朝鮮総督府鉄道局	封筒有り。
17494	朝鮮金剛山	4	日之出商行	
17495	(絵葉書) 清津	2	古尾写真館	キャプション「清津国際ホテル」「清津重要物産 魚油の野積の大観」。
17496	雄基名勝絵葉書	5 (4)		封筒有り。
資料番号・資料名は平和ミュージアムで付与されたものを用いた。また点数について、封筒等は1点とし、() 内に絵葉書の枚数を示した。				

〔注釈〕

- 1 国立民族学博物館「松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション」(<http://nmearch.minpaku.ac.jp/matsuo/index.html>)
- 2 京都大学地域研究統合情報センター「戦前期東アジア絵はがきデータベース」(http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe)
- 3 権懋熙「日帝時代の写真葉書に現れた帝国主義的性格に関する考察」(『釜山博物館研究論集』2002)、「日帝時代の写真葉書に現れた‘再現の政治学’」(『韓国文化人類学』2003)。
- 4 貴志俊彦「東アジアを描く非文字資料のデータベース化」(『歴史と地理』2006・5) 50 頁。
- 5 浦川和也「佐賀県立名護屋城博物館所蔵の「朝鮮半島写真絵葉書」について」(佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』7、2001・3) 25 頁。
- 6 水野直樹「日本人は朝鮮の絵はがきに何を見たか」、高麗美術館編『特別企画展「写真絵はがき」の中の朝鮮民俗 100 年前への時空の旅 [1900-1945 年]』図録 (2010) 6-7 頁。
- 7 浦川和也「日本の「絵葉書文化」の諸相——絵葉書の資料的価値と近代日本人の意識——」(佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』10、2004・3) 46 頁。
- 8 「制度化されたまなざし——初期の絵葉書」(『肖像のなかの権力』講談社 2000・1・10) 103 頁。
- 9 ジョン・アーリ／加太宏邦訳『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』(法政大学出版局 1995・2・22) 2 頁。
- 10 前掲アーリ (1995) 6 頁。
- 11 北川宗忠『観光・旅の文化』(ミネルヴァ書房 2002・4・20) 6-7 頁。
- 12 ここでの議論および二つの観光旅行団については、有山輝雄『海外観光旅行の誕生』(吉川弘文館 2002・1・1) に負う所が大きい。
- 13 小川寿一『日本絵葉書小史 (明治編)』(表現社 1990・9・17) 6 頁。
- 14 樋畑雪湖『日本絵葉書史潮』(日本郵券倶楽部 1936・4・15) 4 頁。
- 15 巖谷小波「画葉書私観」(『ハガキ文学』1904・10)。
- 16 石井研堂『増補改訂 明治事物起原』下巻 (春陽堂 1944・12・28)「私製絵葉書の始」760 頁。
- 17 表 1 作成に当たっては、前掲小川 (1990)・浦川 (2004) の他、『通信六十年史』(通信六十年史刊行会 1930・10・15)、藪内吉彦・田原啓祐『近

代日本郵便史 創設から確立へ』(明石書店 2010・10・1) を参照した。

- 18 佐藤健二「絵はがき覚書——メディアのアルケオロジー」(『風景の生産・風景の解放 メディアのアルケオロジー』講談社 1994・2・1) 42 頁。
- 19 日本絵葉書交換会編『詩的新案絵はがきの栞』(文学同志会 1905・6・8) 4 頁。
- 20 『ハガキ文学臨時増刊第二巻第十三号 万国絵葉書帖』(日本葉書会 1905・8・5)。日本人旅行者が世界各地から寄せた絵葉書を「亜細亜」「アフリカ」「欧羅巴」「亞米利加」「濠洲」「帰朝の船中にて」の順序で配列したもの。文体の相違等から二名以上の書き手が想定できる。
- 21 『万国絵葉書帖』『世界の絵葉書 括論』。
- 22 『ハガキ文学 臨時増刊 絵はがき大観』(1905・4・20)。
- 23 李良姫「植民地朝鮮における朝鮮総督府の観光政策」(『北東アジア研究』2007・3)。
- 24 表 (1) 3 作成に当たっては、前掲李 (2007) の他、高成鳳『植民地の鉄道』(日本経済評論社 2006・1・18)、山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』(風響社 2008・1・25) を参照した。
- 25 前掲李 (2007) 155 頁。
- 26 引用は『定本花袋全集』第二十五卷 (臨川書店 1995・5・10) より。
- 27 引用は『愛山文集』(民友社 1917・11・20) より。
- 28 「一昨日の観光団」(『東京朝日新聞』1909・4・27)。
- 29 「排日派観光団に入る」(『東京朝日新聞』1909・4・11) は「観光団には新に李容植外二名の注意人物を加へたり 右は保護条約締結依頼何れも排日派の領袖として著名な者に今回等しく日本の功を謝せんと声言し居れり」と述べている。「排日派」もまた日本の「文明」に感謝しているという印象を与える記事である。

〔附記〕

本稿に引用した図版の内、図 2・3・8 以外は全て国際平和ミュージアム所蔵資料である。ご協力賜った同館に御礼申し上げます。また本稿は、アート・リサーチセンター連続講演会 4「文学・文化に見る韓国併合と「朝鮮」への眼差し——せめぎ合うイメージ、植民地帝国言説の両義性——」(2010・11・28 国際平和ミュージアム) での発表に基づく。会場で様々なご指摘下さった諸氏に感謝申し上げます。